

## 拝金主義と学問軽視の関係

夏目漱石が病死したのは大正5（1916）年12月9日である。今年は没後100年にあたる。依然として「吾輩は猫である」「坊っちゃん」そして「三四郎」などはよく読まれているというし、「こころ」もまた愛読者は多いという。漱石はやはり国民的作家というべきであろう。

漱石はもとより作家であるから、その作品によって真価が問われるのは当然である。しかし明治期をきた知識人としてみれば、実に多くの随筆、日記、回想の一文、教訓化した「時評」を残している。

昭和3（1928）年から刊行された岩波書店の「漱石全集」（全20巻）には、そうしたすべての文章が収められている。私はこのような一文にふれることで、いわば社会的知恵や人生訓、それに歴史的視野の広がりや獲得できると考えてきた。漱石は、意外なことに人間のナマの姿を探るのに図を描いて説明する癖もあり、それはそれで大いに参考になるのである。

数多くあるそのような一文の中から、第16巻に収められている明治39（1906）年に書かれた「断片」の一文を語っていきたい。この一文は、「国史ヲ専門ニシタ人ガ来テ私モ妻ヲ貴（もら）ツテ子ガ出来タ。是（これ）カラ金ヲタメ子（ね）バナラス。是非共子供ガ修業ノ出来ル程貯蓄ヲシナケレバナラス。然（しか）シドウシタラ好（よ）イデセウ」と漱石に尋ねたらしい。「ドウシタラ国史デ金ガトレルダラウト云（い）フ質問程馬鹿気タコトハナイ」とあきれ、学問と金銭の関係を鋭い視点で指摘していく。つまりところ、漱石の言わんとする点は次のようにまとめることができる。現代的な表現で書く。

＜国史は金にならない。学者になるものである。国史を学んで金を取るというのは、北極へ行って虎狩りをするようなものだ。金がほしければ実業家、商人になれ。学者と町人はまったく別途の人間なのだ。学者は金がない代わりに「物ノ理」がわかるのであり、町人は「理窟ガワカラナイカラ其（その）代（かわ）リニ」金を持っているのである＞

漱石はそのような意味のことを言ったあとに、「金ガアル所ニハ理窟モアルト考ヘルノハ愚ノ極デアル。而（しか）シテ世人一般ハサウ考ヘテ居ル」と嘆いている。金持ちで世間が尊敬しているから、理窟も分かっているに違いない。「カルチュアー」もあるに決まっている、と考えるのは間違いだというのだ。「カルチュアー」がないからこそ、金を抱えているにすぎないと書く。この道理がわからないから、「金持ち共ハ己惚（うぬぼ）レテ自分達ハ社会ノ上流ニ位シテ」いると錯覚するのだと怒る。

その結果どうなるか。自分たちほど道理に通じている者はないと言いだし、学者だろうが誰だろうが、自分たちに頭を下げなければならぬと錯覚するようになる。「カルチュアーガ欠ケテ居ル」何よりの根拠だともいうのである。

社会上の地位は何で決まるか。漱石にいわせれば、（1）カルチャー（2）門閥（3）芸（4）金の四つとされるが、（4）で決まると考える者は、社会を正確にみていないとはねつける。とはいえ漱石は、金は「労力の報酬」であることは認める。しかしこの労力は「今の」であり、「教師ノ報酬ハ小商人ノ報酬ヨリモ少ナイ」が、長い目で見ると労力の分配の高低はつけづらい。

漱石はこのような見方を具体的に執拗（しつよう）に繰り返している。金を持つ者という言い方は、日露戦争後の日本社会の拝金主義が我慢ならなかったのものであろう。ある財閥の当主を名指ししたうえで、「（彼は）別荘を立て連ねる事に於（おい）て天下の学者を圧倒してゐるかも知らんが社会、人生、の問題ニ関しては小児の様なものである。三歳の児童と一般である」と決めつけている。

日露戦争や第一次世界大戦もそうであったが、日本は戦争で勝つことにより、「成り金ブーム」という現象を生んだ。戦争はもうかるのである。同時にそのことによって社会そのものが学問や知識をないがしろにすると漱石は怒っているのである。むしろ漱石は、このようなことを社会思想上で説いていたわけではない。社会の非知性的空気を嘆いているのではない。

商人が金をもうけるために金を使う場合、経済的な次元では誰も口を挟めない。しかし金もうけのために「人事上ニ使フトキハ」道理を尊ばなければならない。そうでなければ、人間を道具に使う「悪」を自らで作り上げているにすぎないと説く。「災ハ必ズ己レニ帰ル。彼等ハ是非共学者文学者ノ云フコトニ耳ヲ傾ケネバナラス時期ガクルモシ耳ヲ傾ケネバ社会上ノ地位ヲ保テヌ時期ガクル」と結ぶ。

今から110年ほど前の漱石の至言、昭和のある時期にこういう「知性を重んじよ」との教えをかみしめておくべきだったのである。